



活動の幅を広げるお役立ち情報「活動に+（プラス）」

古紙リサイクルでポイントを集めて、子どもたちの大きな可能性を応援する仕組み「Pocci!」

「Pocci!」は、古紙リサイクルを通して、地域の子どもたちを応援するプラットフォームです。Pocci!に登録している企業（企業会員）は、古紙のリサイクル量に応じてポイントが貯められ、そのポイントを使ってPocci!に登録している子ども食堂やスポーツ少年団、子ども劇団、吹奏楽団などの団体（地域団体）に対して支援を行います。支援を受けた団体は、10,000ポイント貯まる毎に7,000円を獲得することができ、団体の活動資金として活用できます。

子どもたち応援ポイント「Pocci!」

廃棄物管理コーディネーターおよび再生資源卸売業を行う株式会社SKトレーディングの社会貢献事業です。2022年11月に利府町でスタートし、2024年4月から宮城県各地にエリアを拡大中です。

Pocci!事務局
TEL 022-748-7671 Mail hello@pocci.jp



▶Pocci!ホームページ

●支援を受ける「地域団体」

Pocci!に参加すると、企業から活動資金の支援が受けられます。加えて、Pocci!事務局がインタビューして特集記事を書いたり、日々の活動をホームページ等で発信したりと、団体の活動PRに協力します。

【Pocci!参加方法】

子どもの経験機会や居場所を提供する団体・活動が参加できます。Pocci!ホームページ内の「地域団体申込フォーム」から申し込みます。

●古紙リサイクルを通じて支援をする「企業会員」

Pocci!に参加することで、企業は日々の企業活動から出る古紙のリサイクルを通して、地域で活動する団体を支援することができます。

【Pocci!参加方法】

企業活動の中でダンボールを排出している企業が参加できます。Pocci!事務局までお問い合わせください。

Pocci!ホームページでは、Pocci!に登録している地域団体・企業会員の紹介記事を見ることができます。団体も企業も、Pocci!を活用して地域の子どもたちを応援しませんか？



活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

タクティカル・アーバニズム・ガイド 市民が考える都市デザインの戦術

タクティカル・アーバニズムとは、公共の場での困りごとに対して、解決策になりうることを試み、社会実験や市民によるまちづくり活動のことです。大規模な戦略に基づくアーバニズム（都市計画）に対して、短期間、低コスト、小規模な戦術的手法によることからタクティカル（戦術的）アーバニズムと呼ばれています。提唱したのは本書の著者であり、パブリックスペースの活用や、市民によるまちづくりなど具体的な事例が掲載されています。本書の着想をあなたの地域に取り入れてみませんか？

著者：マイク・ライドン、アンソニー・ガルシア 訳者：大野千鶴 発行者：株式会社晶文社



ぱれっと 12

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと

「ぱれっと」には、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）にいろいろな人が集まり、それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

特集 生きもの豊かな
梅田川を未来につなぐ



一歩踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

一歩踏み出したら、 自分と世界が変わった

しゃぼんぼん 代表 **高橋 爽太**さん(21)

市内の大学に通う高橋爽太さんは、2023年12月に「しゃぼんぼん」を立ち上げました。「高校時代は副部長とかのサポート系の立場ばかりだった自分が、自ら団体を作って代表になるなんて」と、自分の変化に驚きながらも「とにかく楽しい。失敗さえ楽しい」と笑顔で話します。2023年春、高橋さんが山元町にいちご狩りに行く予定をゼミで話したら、先生がつながりのある山元町の団体を紹介してくれました。せっかくの機会だからと、実際に団体を訪ねると、夏祭りの運営補助ボランティアに誘われ、山元町でのボランティア活動を開始。夏祭りの他にもイベントボランティアを続けていました。ある時、「しゃぼん玉でイベントを盛り立ててほしい」と頼まれ、引き受けてみると、来場者が喜ぶ様子が印象的で、今後も自分でやっていける手ごたえも感じました。そこで、しゃぼん玉を使って場や人を盛り上げる活動をしようと、山元町で出会った学生ボランティアの仲間たちに声をかけて「しゃぼんぼん」を作りました。団体を作る前は、他の学生ボランティアは自己紹介の時に「○○大学ボラセンから来た▲▲です」「(団体名)の□□です」と言うのに、個人で参加している高橋さんは所属がなく、心もとない気持ちがありました。今は「しゃぼんぼんの高橋です」と自己紹介で言えるようになり、相手からも「しゃぼん玉の子ね!」とすぐ認識されるようになって、「自信が持てるようになった」と高橋さん。集客が少ないなどうまくいかなかったことがあっても、その都度「どうしたら解決できるか」と考え行動することが「レベルアップ感があって楽しい」と前向きです。今、山元町は高橋さんにとって第2の故郷と言えるほど愛着のあるまちになりました。「食べ物美味しく、人が明るくて優しく。どこの地域もそうだと思うけど、僕にとっては山元町が特別」と高橋さん。これからも山元町に関わりながら活動していく予定です。



しゃぼんぼん

メンバーは東北福祉大学、東北学院大学、東北大学などの学生19人。「地域と人をしゃぼん玉でつなぐ」をテーマに、地域活性化や交流人口増加を目指し、宮城県内のイベントでしゃぼん玉ショーや体験型ワークショップを行っています。



▲Instagram

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日	12月11日(水)、25日(水)
年末年始の休館日	12月29日(日)~1月3日(金)
開館時間	月曜日～土曜日 9:00-22:00 日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日	毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌木曜日) 年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042
[ホームページ] <https://sapo-sen.jp>
[サポセンブログ@仙台] <https://blog.canpan.info/fukkou/>

「ぱれっと」バックナンバーは
ホームページからダウンロードできます。



ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行 仙台市市民活動サポートセンター (指定管理者：特定非営利活動法人 せんだいみやぎNPOセンター)
発行日 2024年12月1日
デザイン PEACE Inc.





特集

協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」

生きもの豊かな梅田川を未来につなぐ

梅田川は、仙台市青葉区国見ヶ丘を源流とし、住宅地を流れながら七北田川に合流する、地域の人にとって身近な川です。60年ほど前は、ドブ川と呼ばれるほど汚染された川でしたが、市民による清掃活動で蘇り、現在は多くの水生生物が暮らします。一方、かつて流域に広がっていた水田に農業用水を引くために作られた堰や工作物などの段差は、使われなくなった今も多く残り、魚の遡上を阻んでいます。人と自然の共生を目指す、協働による川づくり活動をご紹介します。



仙台リバーズネット・梅田川
(以下、リバーズネット)

会長

くすはら としゆき
楠原 俊之 さん

市民に愛される梅田川の環境づくりを目的に、清掃活動や環境学習講座に20年以上取り組んできた。



特定非営利活動法人
水・環境ネット東北(以下、水ネット)

事務局長

やたがい ひろこ
谷田貝 泰子 さん

水環境関連の市民活動団体等の中核的存在として、「産」「官」「学」「市民」をつなぐ。



宮城教育大学
(以下、宮教大)

生物学教室 准教授

むなかた ありむね
棟方 有宗 さん

国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター(以下、土木研究所)と共に切欠き魚道を研究。

協力

カントリーパーク新浜、カワラバン … 環境学習のノウハウや必要備品の提供
仙台市建設局下水道建設部河川課 … 梅田川の整備、利活用等に関する許可可など



2024年10月、梅田川に親しみを持ってもらおうと、イベント「梅田川生きもの調べ隊」が開催されました。共に運営にあたったのは、リバーズネット、水ネット、宮教大棟方研究室です。親子や自然に関心のある市民など36人が参加し、調査キットで水質を調べたり、水中にいる生きものを捕まえて観察したりしながら、川での時間を楽しみました。この日はウグイ、ドジョウ、川エビ、モクズガニ、ヤゴなどを観測。小学2年生の子どものと参加した親は、「最近子どもが生きものに興味を持つようになっていたので、実際に触れられて目を輝かせていた」と振り返ります。

1
ねらい

身近な川で
あり続けるために



子どもたちが立ち入れる
川の自然を残したい



2022年5月、仙台市による梅田川の護岸工事に併せて、荒巻三番堰に「切欠き魚道」※が整備されました。きっかけは、リバーズネットが梅田川にある魚の遡上を阻む堰を調査で明らかにし、魚道の整備を仙台市に願い出たことです。「川から生きものが消え、地域の人が川の生きものに触れる機会がなくなっていけば、川への無関心、ひいては川の自然喪失につながる」と声を上げました。また、2019年に仙台市と土木研究所が、青葉区の竜の口溪谷における魚道整備を進める、多自然川づくりに関する研究の覚書を結んでいたことも後押しとなり、梅田川でも持続可能な生態系の保護・回復に向けて動き出しました。
※切欠き魚道:既存の堰の一部を削って作る、低コストの新しい工法



2
ポイント

梅田川を
好きになってもらうための作戦



市民の手で魚道を手
入れしていくための
知識をつなぎたい



魚道は作って終わりではなく、効果を維持するために、見守り、メンテナンスをしていく必要があります。「梅田川生きもの調べ隊」は、梅田川に関心を持つ未来の担い手を絶やさないための一歩です。水ネットは、イベントの広報や申込受付など裏方を引き受け、リバーズネットは、子どもたちが安全に川に立ち入れるよう事前の草刈りなどを担当。参加者は堀の上から川を眺めるだけでは見つけられなかった、2~10センチほどの魚を見つけ、「こんなに魚がいたんだ」と驚きます。また、宮教大の棟方さんをはじめ、卒業生ボランティアによる生きもの解説は、参加者にさらなる学びや新たな発見を与えています。



3
これから

いつかサケも上らせてみせる!
市民参加の自然再生活動で目指す未来

魚道整備による効果はさっそく表れています。2022年のモニタリング調査では、これまで荒巻三番堰より上流で確認できなかったコイ科のオイカワという魚が発見されました。しかし、全ての堰が解消されたわけではありません。かつて、たくさんのサケが遡上した梅田川。下流に戻ってくるようになったサケは、堰より先には進めません。自然と親しみ、共生する心を育み続けることが、梅田川の自然再生の鍵です。



問合せ先

特定非営利活動法人
水・環境ネット東北

TEL
090-2979-5755

Mail
mizunet@mizunet.org